

にそれぞれ「萬相莊嚴金剛心」「大勇猛智慧藏心」、左側に同じく上下に「如那羅延堅固幢心」「如衆生海不可盡心」と、都合三行に書し、各々それらを蓮臺の上にのせる。そして全體の上部には三寶を示す梵字六字が横につらねられている。禮拜の仕方は、この前に立つて合掌し「南無同相別相住持三寶、生々值遇頂戴、萬相莊嚴金剛心、大勇猛智慧藏心、如那羅延堅固幢心」と唱へ、次いで「如衆生海不可盡心」にうつると共に身を投じて禮し「生々世々皆悉具足」と稱して終わる。これを朝晝夜の三時に各三返りかえして行うのである。

前著「禮釋」では、これにつき、かかる名字本尊の正當性、その禮拜の典據、三寶並に四心の義理、西方信仰との關係、在家者に於ける禮拜の仕方等とき、後者では更にその徳を詳述している。

さて能歸の三寶はともかく、所歸の四心は、これは「華嚴經」に説く甘種菩提心中の四で、これを以て甘種菩提心を代表せしめるところであり、能所合して以て菩提心そのものを尊重禮拜せしめようとするものである。そしてこの禮拜行は在家行としてすべてにまさり、西方往生についてもその捷徑であるとべる。

ところで我々は本書のなる三年前(建曆二年一二二二)上人に於いて「摧邪輪」三卷、その翌年に「同莊嚴記」一卷が、それぞれ出来ていることを知っている。これらは周知の如く法然上人の「選擇集」に對する痛烈な彈劾の書であるが、全篇をつらぬくものは、専修念佛に於て菩提心を撥去する過に對する憤りである。それは正しく佛道の破滅であるとして、上人の全

身的な護法の情熱と激怒がそこにばくはつしている。即ちそれより幾何もなく本書が成り、三寶菩提心の禮拜を自行し且つひろく出家在家にすめているのは、全くその積極的な對應とせねばならぬ。由來學解に終始する本寺系東大寺華嚴に對し、上人にはじまる末寺系高山寺華嚴の顯著な實踐性が説かれるが、それは「唯心觀行式」や「佛光觀」の如き僧の實踐行のみでなく、「三寶禮」なる民衆的な禮拜行に於て極まると考えられる。

さもあれ、かかる名字本尊の創設は、日本佛教史上、上人に於てはじめてみるところであり、基くところは密教の種子曼陀羅と考えられるが、とにかく明かな文字による本尊形は全くこれを以て嚆矢とする。親鸞の名號本尊、日蓮の題目本尊等がこれにややおくれるものであることはいままでもない。とにかく名字本尊とその禮拜、そして有名な「阿留邊機夜宇和」の提唱等に於てみる上人の宗教運動は、從來の舊佛教の復興なる概念で簡單に律し得ぬ新時代的な性格を具している。我々はこの鎌倉佛教をその單なる傳統の故に、無雜作に新舊に區別することの再認識を求められていると考えたいと思うことである。

### ガンダーラ美術の

#### 思想的背景について

佐々木教悟

ガンダーラ美術の思想的背景をさぐるにあたっては、その美

術がうみだされるにいたつた由来、およびその美術が實際に行なわれた地域と時代とについて、世界史的立場からひろく考察されなくてはならないであろう。

まずその地域をいえば、ペシャーワルを中心とするガンダーラを根本の地盤とし、北はスワート、西はアフガニスタン、東はタクシラにおよんでいる。この地域は西方からインドに入る門戸にあつており、そこをイランならびに中央アジアからインド内陸の心臓部に通ずる交通の大動脈が貫通している。この交通路は、古來より *trunk-road* とよばれてきたが、この通路が軍事外交上、産業貿易上、文化交流上、果たした役割は、けだし想像以上のものがある。すでに紀元前二世紀以來、ヤヴァナ、シヤカ、パフラヴァなどの諸種の異民族があいついで侵入占據し、ここには西方文化を受けいれ、かつ發展せしめうる素地が充分にできていた。ガンダーラ美術に屬する作品は、佛教に關するものが大半を占めるとおもわれるが、しかし彫刻において認められるモティーフの多くは、西アジアか、あるいはヘレニスティック起原のものであり、その點われわれはさらに一層視野を廣くすることが必要である。ペルセポリタン・キャピタルとかマラーン・クレネレーシャンのごときメソポタミヤのモティーフ。それからエジプトなどに見られるスフィンクスやグライフォンのようなファンタスティックな巨人、その他、アトランテイド、花冠をつけたエロテース、セントール、トゥリトン、ヒッポカンブなどの姿をしたものが多い。これらのものの中には、その類型化されたものが、すでにインド古代派の作品中にあらわれているものもあるが、その大半は建築技術な

どとともに、クシャーナに先立つシヤカ・パフラヴァ朝時代（前一〇〇—後七五）に、この地方に導入せられたものといつてよい。われわれはそこにガンダーラ美術の始源期をみとめるものであるが、とくにパフラヴァのゴンドファルネース王の治世（一九—四五）にヘレニスティック美術のルネッサンスがあらわれていることに注意しておきたい。そしてそのヘレニスティックの手法によつてジャータカや佛傳などを題材とするところの、いわゆるギリシア風佛教彫刻が、つぎのクシャーナ王朝時代にぞくぞくと出現するにいたるのである。

さて、この地方において佛教の展開したあとをかながえてみるのに、紀元前三世紀の中頃すぎに行なわれたマツジャンティカ長老一行の開教以來、この地は佛教相應の地となり、前述の異民族のあいだにも佛教歸使者があらわれるくらいにまで弘通していた。そこえクシャーナ族が侵入し、ガンダーラを中心とする大帝國をつくりあげた。カニシカをはじめとするクシャーナの諸王が佛教を外護したことは、あらためて説明を要しない。このクシャーナ王朝時代（一世紀中頃—三世紀中頃）に、ガンダーラ地方に行なわれた佛教は、有部、飲光部、多聞部、大衆部、法藏部、化地部などの部派佛教と大乘佛教とであつたが、とくに多聞部に所屬していたといわれるアシュヴァゴシヤ（馬鳴）長老や、その系統のマトトリチエータ（摩啞哩制吒）阿闍梨耶による讚佛乘の活動は、部派と大乘のあいだの疎隔をやわらげるのに役立つたとおもわれる。一般佛教徒の崇拜の中心となつていたものは、いうまでもなく佛陀釋尊であつたが、成道前の釋尊が菩薩として崇拜せられ、また過去佛や未來佛の

崇拜もあらわれていた。佛舍利の崇拜はスツッパ(窒塔波・塔)の建立を急速に促進せしめた。「佛の生前に供養するときと、死後佛塔に供養するときと、同じ心にて供養するならば、その受ける所の果報も同一である」(大毘婆沙論卷一一三)という見解は、有部のみのもではなかつたのであろう。そして塔崇拜の思想は、大乘の見寶塔(法華經)というかたちで、この時期にこの土地で完成するにいたつたとかんがえられる。

従来より學界の一部において、ガンダーラ美術は大乘思想にもとづくものであるとか、あるいはまた、大乘というよりはむしろ部派小乗に關係せしめうるとかいわれてきたが、これは大乘とか部派小乗とかのいづれにかぎるべきものではなくて、佛敎全體を通じて、その當時澎湃としておこつていた佛徳讃仰、菩薩思想の昂揚、佛塔崇拜の旺盛な信仰とそれにとまなう塔や伽藍の建立寄進の流行、およびヘレニスティック美術の東方における絶えざる活動とに由る所産と見るべきであらう。そして主導的な役割を果たしたのもとして、有部の思想とヘレニズム文化の精神とがあげられる。キニク派、キレネ派、ストア派、エピクロス派などは、いづれも超ボリス的に人間の道を探求し、それを人間一般の道として擴大する方向をとつたといわれるが、クシヤーナ帝國治下の思想家たちに、これがどのようなに反映したかすこぶる興味のある問題である。

## 空觀について

安井 廣濟

われわれは、すべてのもの、すべての出来事を、われわれの欲するままにえがこうとするが、佛敎は、このようなわれわれの固執・執著の立場を否定して、われわれのえがくところのものが、われわれのえがくままに存在しない、空しいものであるとする。これは、佛敎一般に通ずる、佛敎の最も根本的な考え方といつてよい。では、何故に、すべてのものが、われわれのえがくがままに存在しない空しいものであるか、というと、この點について、佛敎では「縁起」ということを説いている。縁起の敎説については、學者によつてかなり異論があり、また、佛敎思想の發展とともに、その内容にもかなりの異論がみられるが、ともかく、「縁起」とは、「すべてのものが縁つて生起する」ことを意味する。

初期の經典に出ている喩えによつて、この縁起ということを理解すると、たとえば、われわれは自己の住む家屋に愛著をもつ。われわれは自己の住む家屋が崩れないように、自己の家屋の常住に固執・執著する。しかし、木材に縁り、蔓草に縁り、稻藁に縁り、泥土に縁り、空間が圍まれて、家屋という名稱をうるにいたる(M. N. I. p. 190)のであつて、たとえば、われわれが家屋の常住に固執、執著しても、木材や泥土などの